

「はむらの授業指針」子どもの視点②

学び方が分かる

① 学習の自覚化

授業中の学びをマラソンに例えると、学習目標はゴール、学習の流れはコースに当たります。ゴールとコースが示されないマラソンはありません。授業の冒頭、「何のために、何を、どのように」学ぶのかを、子どもの発達段階に応じて具体的に示すことは、主体的な学びの実現に不可欠です。

具体的には、学習目標と学習の流れを板書するなどし、子どもが常に自覚しながら学習を進められるようにします。



② 問題解決的な学習の推進

次に挙げる学び方の基本を教えたあと、探究的な学習過程で子どもが活用しながら定着を図ります。

- 課題の見つけ方や設定の仕方
- 目的や意図に応じた情報の集め方や調べ方
- 整理・分析の仕方
- まとめや発表の仕方
- 報告や発表、討論の仕方
- 観察や実験の仕方
- 見通しや計画の立て方
- 記録のとり方や活用の仕方
- 振り返りや自己評価の仕方

③ 思考・判断・表現の活性化

ある小説家いわく、「我々物書きであっても、書くことがあらかじめ『ある』わけではない。書きながら考え、考えながら書いている。書くことは、考えることである。」

ある一定の思考を働かせる場合、書くことによって自らの思考を「可視化」することが大切です。

「ノートは思考の足跡」

これは、ある小学校の教室掲示です。せっかく自分の考えをノートに書いたのに、級友の優れた意見を聞いたり、教師が示す解答例を見たりした途端、自らの記載事項を消してしまう子どもがいます。

ノート指導で最も重視すべきは、「自分の考え」です。自らの思考の変遷が分かるよう、ノートのとり方を工夫させましょう。また、教師がノートを定期的に確認し、個人内評価によって頑張りを認め、励ますことは子どもの学ぶ意欲と自尊感情を高めます。

精神の骨格をつくる読書

京セラ名誉会長 稲盛和夫

自分を高めるために読書をしてほしいと思います。真剣になって、良い本を読むということをぜひとも行っていただきたいのです。（中略）仕事で苦勞し、その実践の中で自分を磨き、勝ち得たものが一番重要なのですが、それに加えて読書で、自分が経験していないことを吸収し、経験したことを整理していくことが必要です。

この実践と読書が、人間の精神の骨格をつくっていくのです。

出典：稲盛和夫著「心を高める、経営を伸ばす」（PHP研究所）

※ 稲盛氏は、自他共に認める読書家。トイレへも風呂にも、本をもって入るのだそうです。